

## 世界の中の日本の教育 (講演要旨)

国立教育研究所長 平塚 益徳

### I はじめに

東京には、国立教育会館という立派な施設があり、全国的な視野においてなされる研修のセンターとしての役割を果たしておりますが、それと並んで、全国的な視野のもとに教育の研究を推進している一つの機関である国立教育研究所というものがあります。この新潟県立教育研究所も、この二つの機能を併せて発揮することが必要であるということで、国立教育会館を代表される天野先生と、私が参ったわけでございます。そうして、大変感銘深い新潟県立教育研究所の創立満15周年のお祝いをいたしたわけでございます。

きょうは、こういう大切な研究所の記念講演でございますので、かなり思いきったことを申し上げてご参考の一端に供したいと思えます。

前もって結論を申し上げますならば、「現在の日本の教育は、ほんとうにもっとしっかりしなければ困る」ということでございます。もちろん、たくさんあるいい面を決して無視いたしませんけれども、ややもすると、それをおおってあまりある悪い面・改めなければならぬ面がたくさんあると思うわけでございます。そこで私は、世界の教育を背景としながら日本の教育についてお話し申し上げたいと思えます。

### II 世界の教育情勢と日本

現在、日本の教育は世界の中で最高峰の地位にあるということは、まことに喜ばしい事実であります。

現在、世界にはユネスコ(UNESCO (United Nations Educational Scientific, and Cultural Organization))に参加している国は117か国、参加していない国が約10か国で合計130に近い国々があります。これらを、文化、社会、経済などいろいろな面の発達段階で分類いたしますと、先進国(20数か国)、中進国(20数か国)、後進国・開発国家(developing country

(80数か国)の3つのグループになります。私はいまここで断言できますことは、たとえ先進国であっても、どの国であっても、現在その国の最も重要な課題として教育をとりあげていない国はありません。このように、国家的・国民的あるいは民族的に、そうして国際的規模において教育が尊重されている時代は、世界の歴史において、かつてなかったことであります。

このたび、私はUNESCO本部からの招へいで、ロンドンで開かれる国際会議に出席しますが、この背景には二つの重要な事柄があります。その一つは、UNESCOがもっと日本の教育の力を借りたいということで、具体的には、カラチプランの推進のために国立教育研究所とUNESCO本部の教育局との密接なる協力関係の可能性の検討ということでもあります。もう一つのことは、OECD(経済協力開発機構)が日本に対して非常に教育的な期待をもち、国立教育研究所に対しましても、これから具体的に教育研究の研修についての役割を果たしてほしいとの強い要望がきているのであります。これのごときは、いまだかつて考えられたことのない国際的な規模における教育の動きであります。現在、世界には大きな教育の波

が四つあります。

第一の波は、ソ連がその原動力をなしたのでありますが、ナショナリズム nationalism (国家主義) という、一番大きな波であります。

第二の波は、国際主義 international nationalism であります。

第三の波は、教育の民主化ということであります。現在、私たちが中教審で後期中等教育の問題を真剣に考えているのも、もっと日本の教育を民主化したいということです。

第四の波は、科学技術の大きな研究あるいは推進の波であります。

このような波が原因となって、世界の教育を大きく動かしているこの厳然たる事実の前に、日本の教育がどういう点で長所をもち、短所をもっているかということを、しっかり考えるということは、非常に重要なことだと思います。

### Ⅲ 日本の教育の長所

日本の教育の長所として、国際的に認められていることとして申し上げなければならないことは、第一には、教育の普及度が実に高いということです。高等教育では、日本の水準はソ連と並んで世界で第二位であります。また、中等教育も世界第二位（第一位はアメリカ）、初等教育のごときは、西ドイツと並んで世界第一位、これはアメリカを非常にひきはなしております。したがって初等・中等・高等の三つの段階をおしなべて、全体的に申しますならば、わが国はアメリカと並んで世界第一位に教育が普及発達している国ということが世界的に認められているわけであります。この世界で第一位の教育の普及発達している国が、決して現在の問題だけではなく、過去にさかのぼってみましても、世界的に有数な教育の発達した国であったということが、必ずしも国民のあいだに浸透していないという事実は、非常に残念なことであります。日本が開国し、明治5年8月の新しい教育制度施行以来、100年にもならないこの間に、すい星のごとく、ぐんぐん教育の普及発達の実を示して世界有数の国になった。この秘けつはどこにあるかと申しますと、決して外国の学者たちが申しますように、さるまねなどではありません。これは、私の持論でございますが、教育というものは、決して、一朝一夕にしてなるものではありません。「ローマは一日にして成らず」のことわざとおりであります。現在のわが国の教育の水準の普及発達ということには深い根があるということ、われわれの先輩たちの努力があるということを忘れてはなりません。私は、私の好きなことばとして、日本民族は教育的なエネルギーにおいて世界有数の国民であるということ、教育的エネルギーの満ちあふれている国民であると考えております。時々、留学生諸君にこの事実を知ってもらうために、私は、江戸時代の藩校を中心としたみごとな研究である石川謙先生の「近代学校教育発達史」と、当時寺小屋で使われました教科書、すなわち往来物、とくに女子の使ったものを具体的に示し、日本は明治以後だけでなく、それ以前において寺小屋が発達し、藩校が発達し、その他いろいろな教育の機関があったということを説明いたしました。このことは、外国の人たちにとっては非常な驚きで、無から急に外国のものをまねてつくったのではなくて、具体的に根があったというこの事実を、私はもっともっと日本人自身がわきまえる必要があると思います。

第二の長所としましては、こういう過去の私たちの祖先のよい積み重ねというものを土台として、明治維新の指導者が、どんなによく外国の教育の長所を調べ、それをとり入れて、わが国独特の教育制度をつくるための努力をしたかということです。具体的に申しますならば、明治5年の学制というものの

その大きさと、この背景としての教育に対する考え方のすばらしさを私たちは忘れてはならないのであります。

第三の長所としましては、明治以後、とくに明治から大正にかけましてのわが国の教育の努力というのが、すでに現在と同じように高い水準にあったということであります。具体的に申しますと、明治38年日露戦争が終わったこの時期を境といたしまして、わが国は当時の戦争の相手国でありました帝<sup>1</sup>ロシア、お隣りの中国、インド、トルコ、その他その付近の多くの国々、さらにアメリカに対してもわが国の教育が非常に具体的にいい影響を与えたという事実であります。日本の教育の歴史を編さんする場合、私たちは、こういう点について私たちの先輩の努力、しかもその努力というものをじゅうぶんに評価する必要があります。

以上、ごく簡単でありましたが、私は日本の教育が世界で非常に高く評価されている。その具体的な事実として、UNESCOやOECDからいろいろなことを頼まれる可能性がある日本ということに相成ったわけであります。この点私は、やはりわが国の教育に対する積み重ねとして、感謝の気持ちをもって、その力あるいは成果をまちがいないかたちにおいて発揮させなければいけないと思うのであります。

#### IV 日本の教育の短所

世界の中の日本の教育を考えますときに、率直なことばで表現するならば、私は日本の教育は盛んであることが実はマイナスであると思うのであります。すなわち、日本は教育が盛んだということだけで安心してはいられない。教育が盛んだということは、実は日本の将来をあぶなくしているということでもあります。それはなぜかという、どう考えてみましても日本の教育は、教育という大きな働きの中のたった一つの働き、すなわちスクーリング schooling（学校教育）ということだけが教育として考えられている。そこに根本的な日本の教育の弱点があると考えるのであります。申すまでもなく、エデュケーション education という大きな働きのなかには、家庭、学校、一般社会、そして最近ではマスコミという四つの働きがあります。したがって、わが国は四分の一の働きしか示さない学校教育だけを教育と考えるというおろかさから、どうしてもぬけきれないでいるのであります。

##### 1 大学入学試験について

私はいま、日本の大学入学試験をなんとかよく改善したいと、文部省の大学入試改善委員会の先生方と一生懸命努力しております。世界の先進国20数か国の中におきまして、日本の大学入学試験ほど拙劣な選択方法をとっている国はありません。その拙劣な入学試験が、現在力強く全国的に行なわれているその根本はどこにあるかという、教育は学校、学校は大学という非常に深い根をもつ悪循環にあります。また、本当の教育というのは、フランスの永久教育、イギリスの継続教育、ドイツの社会教育という考え方のように、家庭教育に始まって、それらをもとにして、もっともっと生がいをかけて勉強しなければいけないというこのふんい気というのは、先進国であればある程それだけ高いわけであります。逆にわが国は、学校ということが人生の目的となっているのであります。私たちは、学校の重要性をあくまでも主張しておりますが、重要性を主張することと、学校だけが教育の機関であるという考え方とは全く別問題であります。

## 2 能力観について

わが国の教育に対する考え方を改めるためには、能力に対する考え方を徹底的に反省吟味する必要があります。それはどういうことかと申しますと、わが国におきまして能力というものは知識の力あるいは技術の力のみを意味しているのです。それらはたしかに能力であります。しかし、人間の一生を通じまして、能力というものは、知識・技術のほかに芸術の力があり、特に重要な力として、社会的能力ということばを私たちは忘れてはならないのであります。社会的能力という能力は、実に大切な、ある場合には知識よりも大切な能力であります。アメリカでは、この能力の開発のために学問的な努力を、グループ・ダイナミクス group dynamics あるいは人間工学という面で行なっております。人と人との関係において、謙虚にして思いやりがあり、相手を阻害させるのではなくて力を与え、暖かさを与える。これは社会的な能力、人間のよさということであります。カント Kant, Immanuel の有名なことばの中にも、人と人との関係というものを一つの能力としてとらえています。人と人との関係をスムーズにするということは一つの能力であります。こういう力というものは人間の社会生活において非常に重要な力でありまして、わが国はこういう面の力を養うことが非常に怠られております。大学試験のごときはこの点が全然無視されているのであります。こういう能力は、面接や内申書によってはじめて発見されるわけですが、少なくともいままでは、内申書が無視されているということであります。

もう一つの能力は、身体的な能力であります。われわれの生活の中におきまして、身体的能力というものは非常に大切な能力であります。ローマに始まりましたことわざ「健全なる精神は、健全なる身体に宿る」ということを、特にイギリスが非常に追求しておりますように、からだというものの能力は決して無視することはできません。ひ弱い知識人だけでは困る。人を人とも思わない知識人では困る。技術人だけでは困る。もちろんこういう面の能力があって、しかも知識あるいは技術あるいは芸術というものが深まり高まること、これは望ましいことには違いありませんが、よしこの面が少し落ちても、身体的な能力さえあれば人間の社会生活については非常に重要な役割が与えられるべきである。この認識というものを家庭生活の中から確立すべきである。また、学校生活の中にそれが貫き通されるべきである。一般社会生活の中においてこういう面がもっともっと高く評価されるべきであると確信いたします。

先日、社会開発懇談会が中間発表として公けにしました中に、私たちは、能力の開発ないしは能力観というものを改めなければいけないということと同時に、国家的な褒章<sup>ほうしょう</sup>ということ考えた場合にも、もっと現実の政治、たとえばほんとうにりっぱな家庭生活をしているお母さんを、国家がほんとうに表彰すべきだ、あるいは職場の中においてほんとうにまじめに働いている人たちを、国家的な意味において高く感謝の意を表すべきだということを一項目強くうたいあげました。幸いに、これはとりあげられまして、将来の施策にでることを期待しております。

## 3 職業観について

第三に申し上げたいことは、人間の職業というものは、全き意味において、それぞれの特色・能力・適性において、それぞれの場において最善を尽くすことが人生においても一番の幸福だという、この職業観の確立であります。いま申しました5つの能力をよくあるいは完全に発揮させることによって、その場で自分の特色を生かし、しっかりした生活を営むこと、そこにわれわれの職業の問題が解決されるべきだと思います。私はこれまで何回もルーブル博物館へ参りました。そこで人類の残した天下に名だたる芸術的な傑作品をまのあたりにするということは実に大きなインカレッジメント encouragement となるわけ



ですが、私がいつも経験しておりますことは、二つの作品の前にとくにたくさんの人がたむろしている。その一つは、あまり大きな絵ではありませんがあの「モナリザ」Mona Lisaの絵であります。もう一つの絵は、これを私は職業観と関連させて申し上げたいのですが、ミレーMillaïsの「晩鐘」であります。しかもそれは隅のところに掲げられてありますけれども、多くの人たちが深い感慨をもってその絵を見ているのであります。しからば、なぜ多くの人が立ち去らずに、感慨をもって眺めているかを考えてみますと、どうしても、欧米の社会を通じて深く根を下ろしている「コーリング」callingという考え方に考え及はざるをえないのであります。職業観、これを私は召命観ということばを使います。どんな職業でもその中に最善を尽くし、建設的な生産的な労苦を惜しまない、その職業の中に人生のほんとうの幸福があるんだということを、実はミレーの「晩鐘」が私たちに教えているのであります。ロマン・ローランがミレーについて伝記を書きましたときに、あの「晩鐘」は決して人に教訓を与えようとして描いたのではなくて、感動のあまり描いたのであるといっています。たまたま農村において健全な若夫婦が一日の野良の仕事を終えて、夕べの鐘を聞きながら感謝の祈りをささげていた。そこにミレーは画家として最大の人生の美しさというものを感じ、感動したのでありましょう。感動として描いた絵が逆に私たちに感動以上に教訓を与えているのであります。どのような教訓かと申しますと、中世的な牧歌的なセンチメンタルなものではなく、もっと現実に深い、労働を尊び、生活を尊び、いみじくもそこに若い奥さんがいる、家庭を尊ぶというあの一幅の絵の中に人生において何が目的であるかということ、実にあざやかに描き示しているといった意味で、ミレーの「晩鐘」は永久に人類の一つの模範と教訓の絵として残るということを考えさせられるわけであります。

以上の点をふまえながら日本の教育を考えた場合に、日本人は盲人であるということになります。

## V 「日本人は盲人である」

日本人は五つの点で盲人である、という私の逆説的なことばに吟味を加えていただきたいと思います。なぜ私が「盲人」ということばをあえて使うかと申しますと、インドは国民の75%、ラオスのごときは現在90%近い文盲がおります。そうして、世界にはおどろくことに、15才以上で、半盲が9億、全盲が7億という文盲の多い中におきまして、わが国は全然逆に文盲が少ないことをもって世界に名だたる国民であります。その文盲者の少ない日本に五つの点で盲人が多いということでもあります。

### 1 個人としての盲人

個人としての盲人とはどういうことかと申しますと、現在の日本の多くの人たちは個人として、人としての基礎的な教育ができていないということでもあります。人間として本来教育さるべきことが、家庭で、学校でできていないということでもあります。私は人間としての根本的特色は四つあると思います。

第一の特色は、ホモ・サピエンスHomo sapiens（知識人・理性人）の特色であります。人間が人間として、単なる動物と違うゆえんは知識があり理性が働くということでもあります。

第二の特色は、ホモ・パティエンスHomo patiens（病的な人間）ということでもあります。これはいつくしみの感情をもつこと、謙そんな自己抑制の感情をもつ、あるいは態度をとるということ、人間は完全でないということの自覚をもつということを表わしています。

第三の特色は、ホモ・ルーデンスHomo ludens（遊ぶ人・遊戯人）ということでもあります。遊ぶ

ということの中に人間性があるということで、芸術はここからでております。

第四の特色は、ホモ・ファバー *Homo faber*（働く人、労作的な人間）ということであります。この労作的な人間というものが、いま本質的において欠けていると思います。何か機械に頼って身体的な働きというものをさげすむという考え方は、人間本来のあり方からだんだん自己をしいたげていく、あるいは自己を弱め崩壊させていくことになるのであります。

この四つが具体的な人間の中にこん然として融和するとき、ほんとうの個人としての人生の完成があると思います。こういうかたちにおいて、私は、もっともっと理性の教育を、家庭生活の中から理性の教育を徹底しなければいけません、さらに申すまでもなく、いつくしむということ、これは宗教の問題ですが、それに悪き遊びを条件としての善き遊び、そうしてほんとうの働き、この四つの面において日本の教育は非常にたりないと、私は思います。

## 2 家庭人としての盲人

わが国は世界で一番教育的に家庭生活が乱れていると思います。私が *UNESCO* に在任しておりましたときに、世界的に家庭の教育の力が失われつつあるということを *UNESCO* が心配いたしまして、家庭の教育的な力をもう一度立てなおすための国際会議がもくろまれました。世界的な現象として、家庭がどうして乱れ、教育色が失われるか、どこにも共通の現象として三つあります。

第一の現象は、世界の変化が急激すぎるということであります。非常な機械の発達、社会生活の変化、そういうことによって、世界の間の価値の標準が非常に違ってきました。まことに残念なことに、この世界的な現象に拍車をかけているのが日本であります。これは教育の責任でもあります。戦後、日本の教育界には、戦前の教育は全部だめだという無責任な発言がところを得ました。この考え方の背景には、父親・母親をして自分たちが受けた教育に対して自信を喪失させました。逆に、先生方が学校の中で、意識的か無意識的かは存じませんが、不用意のうちに、あるいは有意的におっしゃることばの中に、昔はだめなんで、これからだということが、必要以上に子どもたちに影響いたしますと、家庭生活の中において父親・母親が育ちつつある子どもに注意した場合に、子どもたちがそんなことは昔の教育を受けた人たちがいうんだという。これが日本の家庭の教育の力を一番弱めている。元来自信を失っている父親・母親をして一層自信を失わせるわけであります。それに加えて、子どもたちの不必要な、まちがった批判という二重の力が作用いたしまして、わが国が世界で一番マイナスの現象を呈しているわけであります。

第二の現象は、女性が社会的な場にどんどん進出するということであります。もちろんそれ自身決して悪いことではありませんが、このことのゆえに随伴現象として母親や姉などの目上の人たちが家庭から離れるということは、それだけ家庭における教育の力を失うことになります。これまで非常に家庭の教育力を評価していたドイツが、「鍵っ子」ということばを生みだしたように、現在世界で一番悩んでいるわけですが、わが国も全然無関係でないことは、すでにご承知のことであります。

第三の現象は、ラジオ・テレビによる家庭生活の破壊であります。これはアメリカとわが国が一番被害を受けています。私自身テレビの教育的な力を非常に高く評価しておりますが、同時によほど気をつけなければいけないと思います。こういうものが家庭生活の中に時間を問わずはいりこみ、家庭生活をかき乱すのであります。以前は、一家団らんというものは外部から何らのさまたげなく家庭の主体性によってできたのでありますが、現在は文明の利器としてテレビがあるために、家庭の団らんの内容というものがそれによって左右されています。私はもっともっとラジオ・テレビの教育的な再編成ということを国民とし

て考えなければいけないと思います。

こういう面でわが国は、かつてもっていた家庭人としての責任感というか家庭人としての喜びというものの感覚を、世界のどの国よりも失いつつあります。私はこの意味で家庭人としての盲人ということばを使うわけであります。私たちは、この点、学はなければいけませんことは、イギリスの家庭教育の力であります。イギリスの家庭教育の重視ということは世界で一番注目され、私たちもこのことを考えの中に入れなければいけないと思います。

### 3 社会人としての盲人

元来、社会性のないことは東洋人の致命的な欠陥であります。有名なドイツの学者マックス・ウェーバー Max Weber が、東洋人というものは内的道徳と外的道徳の使い分けをするということをまことに痛烈に批判いたしました。これはどういうことかと申しますと、東洋人というものは、身内に対しては非常に犠牲的な、おどろくべき親切をする。その同じ人が、ひとたび知らない人に対してはおどろくべき不親切を働くということであります。社会的な正義感において非常な欠陥があります。また、全き意味における社会道徳の欠如であります。こういう面を社会的に重く制裁しないことが一番いけないことだと思います。こういう点において、私たちはもっともっと真剣に社会的な盲人ということを反省しなければいけないと思います。

### 4 国民としての盲人

戦後の日本の教育界において、国というもののよさに対して目をつぶるという風潮があったということ是否定できません。戦争直後、わが国で使用されました教科書は、いま考えてみますと、おどろく程日本のことを悪くいうことをもって本領とするがごときものでした。この点で、私たちはナショナリズム nationalism ということを実際に考えなければなりません。現在の日本の多くの人たちは、ナショナリズムのことをジャコバン・ナショナリズム Jacobin Nationalism (フランス大革命のときの過激国民主義) と解釈しているようであります。現代の世界は、多くの場合、ジャコバン的な要素からヒューマニティ humanity 的な要素に変わり、ヒューマニテリアン・ナショナリズム Humanitarian Nationalism (人道主義的国民主義) になってきております。

しからば、ナショナリズムとは何かと申しますと、一国の独立と平和を確保し、経済的、文化的な発展をこいねがう精神ならびにその実践であります。しかし、ジャコバン・ナショナリズムは、領土的な野心というよけいな特色がつくのであります。このようになると単なるナショナリズムとは呼ばず、帝国主義と呼ぶのであります。ここでは、言論に対し、思想に対し統制を加え、国の秩序の基礎に軍事力をおくのであります。

つぎに、ヒューマニテリアン・ナショナリズムの特色は何かを申しますと、国の独立と平和、経済的に、文化的に発展をねがうということとはもとよりであります。第一の特色は、自国の発展が他の国のじゃまにならないという、節度のある方向であります。第二の特色は、むしろ積極的に、他の国にプラスになるという方向において自分の国の発展を考えるということであります。こういうかたちにおいて、ヒューマニテリアン・ナショナリズムは世界から歓迎される国民主義であります。そうして、これがこれからのメイン・カレント main current (主流) になりつつあるということ、私たちは世界認識としてもつべきだと思います。この二つの特色に加えて、ヒューマニテリアン・ナショナリズムの国内体制に二つの特色があります。その一つは、思想の複数を歓迎するということであります。もう一つは、

国の秩序・社会の秩序を道徳におくという考え方であります。したがって、こういう国は道徳教育あるいは社会正義ということについて、しっかり教育がふまえている国ということになります。

この二つのナショナリズムの違いというものを、わが国ははたしてどの程度しゅん別して、本来あるべきナショナリズムを追究しているかということが問題であります。このことを大学入学試験にみてみたいと思います。

能力開発研究所は大学入学試験をなんとかして合理化しようと努めているところであります。その唯一の大切な補助的な手段として、いわゆる「能研テスト」を重視しております。この全国的なテストに対し、国家的な統制だという非常に強い批判がございます。このやり方は、アメリカにある四つの入学試験の方法のもっともポピュラーpopularな、しかも成功する方法をわが国がとり入れて、研究実施中という段階であります。現在世界の教育をみまして、国民的あるいは国家的にアジャストadjust（調整；コントロールcontrol統制ではない）しない国はありません。この点で、わが国の大学入学試験が世界的にもっともルースlooseだと、UNESCO主催の教育専門家の国際会議の席上でさえ指摘されたのであります。私の知っている限り、イギリス、ドイツ、フランスの学生たちは、自分たちがどうすれば自分の所属している国がよりよくなるかということを教育の中で考えているのであります。先生方がそういう教育をしているのであります。私はその意味におきまして、能研は一つの例ですが、能研テストを受けることが時間のむだであり、お金のむだであり、そんなことをしているより自分でもって勉強して試験を受けた方がよいと考える生徒を、将来の日本の入学試験制度をよくするための一つの試みに率先して参加するように指導することが不可能だというこの教育は、国に対する盲人をつくる教育だと思います。自分さえよければよいという傾向が非常に強いということは、社会的な盲人であると同時に国家的な盲人であると思います。このことは、世界の中の日本の教育最大の問題であるといえましょう。この理由は、戦争中の狭い愛国心がまだ残っているということであります。フランスのことばでいえば、国境までの愛国心と国境を越えた愛国心の前者であります。われわれが、いま考えている愛国心は、国をよくすることは世界がよくなるんだという方向における愛国心で、国境を越えた愛国の精神であります。これを日本はどうして学校教育の中に受けつけないのか。これは教員養成の問題であり、教師あるいは父兄の問題であり、家庭教育の問題であります。家庭教育の大切な面としては、ホモ・サピエンス、ホモ・パティエンス、ホモ・ルーデンス、ホモ・ファーベルとしての教育と、国に対する連帯責任、国に対する愛情というものを養うことであります。自分だけどうというよりも前に、自分と同時に国によくすることの教育を、しっかりとやっていただきたい。そうして、そういう面で、国民的盲人あるいは国家的盲人でなくしたいと、私は痛切に考えるのであります。

## 5 国際人としての盲人

まず、私は国際主義には二つあるということを申し上げたいと思います。まことに残念ながら、わが国はこの二つを区別できないのでありますが、インターナショナリズムInternationalismとコスモポリタニズムCosmopolitanismであります。コスモポリタンcosmopolitanはアトムatom（原子）的な個人というものが基礎です。個人が国家をとび越えて国際的に交わることであります。インターナショナリズムというのは国民が基礎であります。国民ということになりますと、私たちの存在が国の伝統の中に、国の歴史が個人の中にあって相励み合うことになります。これからの日本の在り方といたしましては、どうしてもコスモポリタニストではなく、インターナショナリストをつくるための努力をしなければ



ばならないと思います。ほんとうの国際人というのはよき国民が基礎であり、国の文化があって初めてほんとうの国際文化ができるということでもあります。湯川秀樹先生が会長をされております世界連邦政府のあの動きも、連邦ということにご注意願いたい。国が連なってそれぞれの国の特色を出しながら世界国家というものをつくろう、世界の平和というものに結びついていこうという点が最も大切になるのであります。この点UNESCOは二十世紀の人類の生んだ最大の傑作だといえましょう。なぜかという、UNESCOの大切なことは、教育と自然科学と社会科学と文化とマスコミという、この人間に与えられた力を総動員して、人類の福祉と世界の平和とを獲得するために国の条約を締結して、相共に理想の社会実現のために努力するという大変すばらしいことだからであります。

私はこのような事実を、わが国がもっともっと確認し、この運動に対して日本が提携し、あるいは縁の下で力持ちにならざるを得ないくらいの一つの大きな国際的な感覚をもつこと、これが国際的な盲人から脱却する大きな道ではないかと思うわけであります。国際的なサービスをするということは、やがて日本の国外における自覚をもたらすのであります。ほかの国にサービスをするということは、サービスをする前に自分の国がしっかりしていなければいけないということを前提としています。ですから、国際主義というものをしっかりすることは、国民主義に徹することでもあります。ほんとうの国際人というものは、その資格として、りっぱな国民、よき国民になるよう努力する国民でなければならないということを、私は身をもって体験しているのであります。

## お わ り に

これまで申し上げて参りましたように、日本は、アメリカと並んで、世界に冠たる教育の普及した国であり、しかも、それは江戸時代からの、特に明治あるいは日露戦争直後の輝かしい歴史があるということ、このことは一にもって日本の教育的な発露であり、よき指導者がそれをよき方向に向けたという事実を、私たちは忘れてはなりません。しかしながらよく考えてみると、この意味は、大変なマイナス的な要素があるということをも忘れてはなりません。その第一は、家庭の教育、特に社会の教育的な力を忘れてはいけないということ。その第二は、職業観の確立、すなわち、職業観がほんとうの面において生命観とつながらなければいけないということ。そうして最後に、私は世界の教育的な面からみて、わが国は五つの面で残念ながら盲人が多すぎるということ。このことにおいて、日本の教育をよくするためには、一つ一つの問題点を明らかにする必要があると、私は思います。学校教育における形式主義のごときは、もっとも私たちが研究し、その弱点、欠点を明らかにしなければなりません。

こういうことを考えれば考えるほど、一つには家庭の面、ご父兄の方々と、二つには学校の先生方、一般の社会の人々の教育の目標を高め、見識を広めるということの必要性を考えるのでありますが、その基礎といたしましては、申し上げるまでもなく、研究という体制をどうしても確立しなければ、私はできないと思うのであります。ご承知のように読売新聞の教育賞には、従来、新潟県が非常にたくさん候補にの

ほり、また選にはっております。それだけ新潟県というものが、教育に対して熱心であるということを、私は非常に強く感じております。その原因には、新潟県全体の県民性というものがあり、県当局のご熱意、大学のよき指導というものも、もちろんあるでしょうが、それと並んで、相当のパーセンテージは、やはり県立教育研究所が占め、大きな縁の下での力持ちの役割を果たしているのではないかと想像いたします。しかも、この想像は、決して単なる想像ではないということを、今朝の式典に列席させていただき、また昨年の読売教育賞の審査にあたりまして、この県立教育研究所のいままでの業績をいろいろと拝見いたしましたして、その感を深めた次第であります。そういう研究所の創立満15周年のお祝いの席にお招きを受け、日ごろ考えております考えの一端を、記念講演としてお話し申し上げる機会を与えられましたことを私は非常に感謝いたしまして、私のお話しを終わらせていただきます。

この講演要旨は、昭和40年6月29日新潟県立教育研究所創立満15周年記念式典後、  
記念講演として、国立教育研究所長文学博士平塚益徳先生からご講演をいただいたものをま  
とめたものであります。

文責 新潟県立教育研究所